

キシヤヤスデの発生について

何年か前に国鉄小海線沿線や、県下各地にクリーム色で体長3cmほどのヤスデが大発生し、各地でヤスデ騒動があったことを記憶している方も多いのではないかと思う。このヤスデは、レール上を大集団で通過中車輪を滑らせて汽車を止めたことからキシヤヤスデという名称がついているが、今年の秋に再び大発生することが予測されているので、その生態を中心に紹介したい。

1. キシヤヤスデとは

ヤスデ類は節足動物門倍脚綱の土壤動物で、国内では約180種が確認されている。ヤスデによく似たものにムカデがあるが、両者の違いは各体節の足の数が1対であるか、2対であるかによって見分けられる。

また習性も大きく異なり、ムカデ類は動きが速く、昆虫類を捕食する肉食性であるのに対し、ヤスデ類は動作が遅く、植物遺体を食べる平和な虫である。

キシヤヤスデは、日本固有のヤスデで、図-2に示すように中部地方を中心に分布し成虫の体長は約30mmと、ヤスデ類の中では大型の部類に属し

体色は褐色あるいはピンクがかったクリーム色である(写真)。

他のヤスデ類と異なる点をあげると、第1に成虫になるまでの年月の長さがある。一般のヤスデ類は1~3年で成虫となり生活史を完了するのに対し、キシヤヤスデは土壌中10cmほどの深さで幼虫期を過し、鉾質土壌を食べその中の有機物を消化して栄養源とし、8年目に成虫となり交尾(生殖)能力を持って地表に表われる。

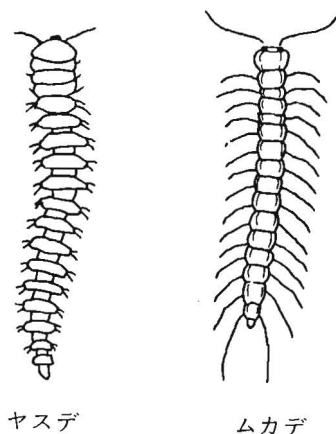


図-1 ヤスデとムカデ(土壤動物学:北隆館)



写真 キシャヤスデ
(×1.5: 新島撮影)

第2の相違点は、キシャヤスデの齢階分布が単一なことである。一般の動物は子供がいれば青年もおり、また老人もいる。ところがキシャヤスデは、ある広い地域の中に同齢のものしか存在せず、ある年には赤ん坊だけ、またある年には壮年だけという現象が現われる。

このためキシャヤスデの発生（成虫が地上に表われる）は8年に1回となり、地表に現われた成虫は大集団を作り移動するので人目につくことになる。

2. 人畜・動植物に対する害

幼虫時代は、土中生活者（主に森林土壌内）で、土壌を食べているので、人畜・動植物には何の害も与えず、逆に土壌耕転作用からみると森林土壌に対してはプラスの面を持つといえる。また成虫になり地上に出現しても食物は落葉などの植物遺体であるので、落葉分解に寄与することはあっても害とはならない。しかし大量に成虫が集まると簿気味悪く、特に住居周辺に現われると何とも始末におえないため、一般に不快害虫と云われている。

3. 前回の大発生

県内での大発生は、昭和51年秋に、発生が確認された。主な場所は、小海線沿線、八ヶ岳、美ヶ原、霧ヶ峰、八千穂高原、松本市周辺、茅野、諏訪、岡谷、塩尻、贄川、奈良井、木曾福島で、その季節は9月から10月頃であった。なお集団移動中のヤスデの数は、小海線のレール上で、1m当たり130～170匹という例が記録されている。

4. 駆除法

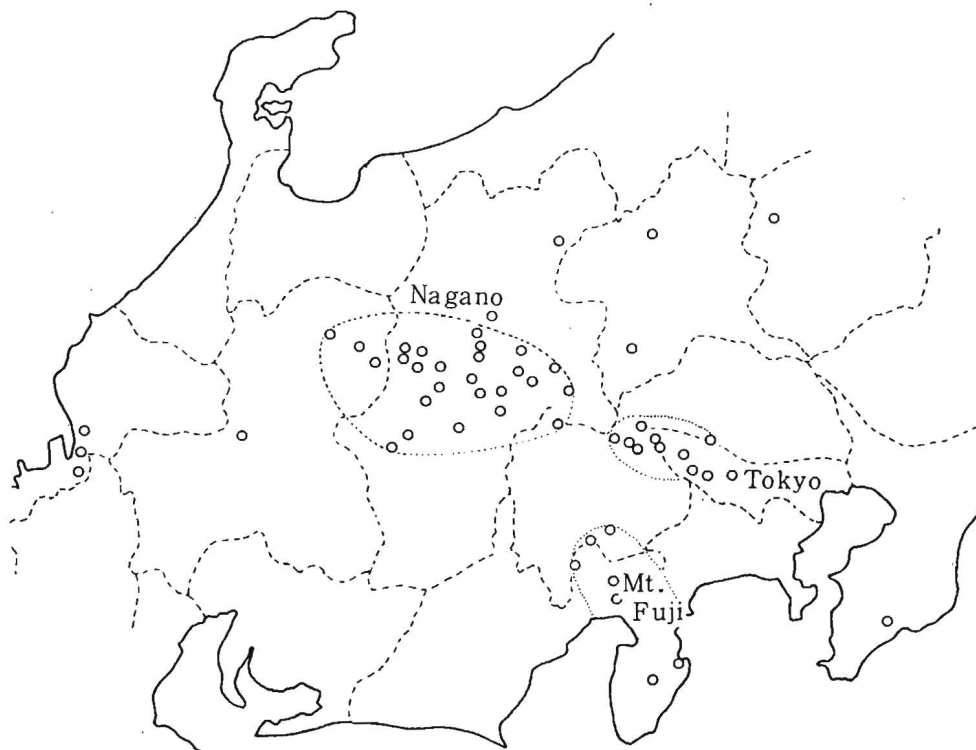


図-2 キシャヤスデの発生が確認されている地域（新島原図）

これまで実行されている方法は、掃いて棄てる方法から、熱湯、殺虫剤、はては火炎放射器まで出現し、人間とヤスデの戦争の様相を呈するが、たとえ殺しても、死体の山を作ることにとどま

り、その処理に困窮している現状で、今のところ有効な防除対策は残念ながら見当たらない。殺虫剤に対する抵抗性も極めて強いこともあり、殺虫よりも忌避効果を持った薬剤の開発が待たれる。

(造林部 片倉)